

聖書：ガラテヤ 6：1～5

説教題：互いの重荷を負い合い

日時：2013年8月11日

ガラテヤ人たちは、5章15節に記されていたように、互いにかみ合ったり、食い合ったりしていました。また5章26節に記されたように、互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりしていました。そんな彼らにパウロは、肉によってではなく、御霊によって歩みなさい！と語りました。そして御霊によって歩むなら、どんな実が結ばれるのか、「御霊の実」について5章22～23節で語りました。

このように御霊に導かれるクリスチャンは、どのような歩みをすべきでしょうか。その人はいどみ合ったり、そねみ合ったりしないだけではなく、より肯定的・積極的な生き方をします。そのことをパウロはこの6章で語って行きます。

まず1節：「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。」 他のクリスチャンが過ちに陥ったのを見て、ガラテヤ人たちがしていたことは、それについて責め立てることでした。いいものを見たぞ、と言ってほくそ笑み、容赦ない攻撃を加える。その問題点を指摘できるほど、自分は正しく立派であると優越感情・快感に浸ることでした。パウロはそのようにすべきでないと言っています。では、ただ騒ぎ立てなければ良いのでしょうか。見て見ぬ振りをすれば良いのでしょうか。ともすると私たちはその道を行きがちです。下手に誰かに関わるとエネルギーがいらいます。面倒です。あの人はあの人。私は私。しかしパウロは御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい、と言います。この「正す」という言葉は「元の状態に戻す」という意味の言葉です。マルコ1章19節でゼベダイの子ヤコブとヨハネが舟の中で「網を繕っていた」とある時の「繕う」という言葉がそれです。しかし大事なことは「柔和な心で」それをするということでしょう。「柔和な心」とはへりくだった心、低い心のことです。マタイ11章29節でイエス様について語られている箇所「心やさしく」とある部分の「やさしい」という言葉です。またこの言葉は御霊の実のリストである5章23節に出て来た言葉と同じです。御霊の実について語り、理解したつもりになるのはそう難しくありません。しかし私たちが御霊の実を実際に結んでいるかどうかは、このような兄弟姉妹との具体的な関係において現われるのです。御霊に導かれている人は、スーパーマンになって他者を見下す人ではなく、兄弟姉妹の過ちを柔和な心で正してあげる人です。もちろんこの優しさは、何でも許容するいい加減な人になることとイコールではありません。そうではなく、相手の真の益を願って低い姿勢で関わること。高圧的にならず、イライラせず、忍耐をもって関わること。そのような柔和な心

で訓戒がなされる時、それは真に力あるもの、また効果あるものとなるのです。

この働きをするのは長老や牧師だけではありません。御霊を頂いているクリスチャンすべてに今日の御言葉は言われています。ですから私たちは誰かの過ちを見た時、すぐに長老や牧師に言わなくて良いのです。いや第三者に広めてはならないのです。イエス様はマタイ 18 章 15 節で「もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。」と言われました。私たちは兄弟姉妹の罪がなるべくプライベートなレベルで正され、処理されるように努めるべきです。それがうまく行かなかった場合、他の一人か二人と一緒に連れて行きなさい、それでもダメなら教会に告げなさい、すなわち今日の私たちで言えば、小会に告げなさい、というプロセスがあります。しかし最初から長老や牧師に告げるようなことをしてはならないのです。兄弟姉妹の過ちに気づいた人が、祈りと柔和な心を持って関わるべきなのです。

パウロはこの働きを行なう際の注意を 1 節後半で付け加えています。「また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」1 コリント 10 章 12 節：「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」この絶えざる自己監視、自己点検、自己訓練をおろそかにすると、私たちのアドバイスは一段上からのものになってしまいますし、不適切な優越感情を持ってなされてしまいます。私たちはいつ自分自身が倒れるか分からないような弱い存在です。そのような自分自身への真摯な反省や取り組みがあつて初めて、私たちのアドバイスは柔和なものとなり得るのですし、またそれは相手の心に届く真に力あるアドバイスとなるでしょう。

2 節：「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」これは 5 章 13～14 節で言われていたことと同じです。キリストによって救われ、御霊の祝福を頂いたクリスチャンは、自分一人がきよくて、他の人には関わらないという個人主義的な人になるわけではありません。キリストにあつて自由を頂いたクリスチャンは、互いに仕え合う歩みに進むのです。それを言い換えたのが 6 章 2 節の「互いの重荷を負い合う」ということでしょう。重い荷物は確かに誰も背負いたくありません。何かを担わなければならないとしても、私は一番軽い物にしてもらいたい、と思いがちです。しかしキリストにあつて救われた私たちは、神の子どもたちである、とこの手紙の中でも語られて来ました。大切な家族の一人が困っているのに知らんぷりをする家族はいません。自分ができることをもって、一生懸命助け合い、支え合うのが自然な家族の姿でしょう。そのように私たちも互いにに関わり、重荷を負い合うように、と言われています。そうしてキリストの命令、すなわち「わたしがあなたがたを愛したように、そのようにあなたがたも互いに愛し合いなさい。」という律法を全うする者になるように！と語っているのです。

パウロはこのアピールを強めるために、3～5節のことを語ります。3節：「だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。」ともすると私たちは過ちに陥っている兄弟姉妹を見て、助けようとせず、あれはどうしようもないと言って心の中で見下す態度を取りがちです。なぜそうしてしまうのでしょうか。この3節によれば、それは自分を立派だと思い込んでいるからです。自分はその人とは違って立派な人間なので、そんなどうしようもない人のために手を貸し、わざわざへりくだって仕えてあげることが嫌なのです。しかしパウロはそんな人に向かって「りっぱでもない自分を」と言います。こう言い切れるのは、すべての人は神の前に罪人だからでしょう。誇るところを本来何も持っていない私たち。そんな私たちが、自分は周りの人とは違うりっぱな間だと思えば、それは大いなる勘違いであり、自分を欺いていることだ、とパウロは言うのです。

そこでパウロは4節で「おのおの自分の行ないを良く調べてみなさい。」と言います。大事な点は、他人との比較によってではなく、ということです。他人と比較すると、私たちは自分がより勝っていると考えると高ぶり、優越意識を持ち、相手を見下すようになります。反対に自分が劣っていると考えると、落ち込み、絶望し、相手に対する嫉妬心、妬みの思いを持ちやすい。4節後半は少し意味が分かりにくい表現となっていますが、言いたいことは、人との比較によってではなく、ただ神とあなたとの間で自分のことを考えよ、ということです。そのように自らを調べる時、そこには誇れると思うことがあるかもしれません。この「誇り」は、罪深い肉的な誇りではなく、主にあつての誇りです。たとえばⅡコリント10章13節でパウロは言っています。「私たちは、限度を超えて誇りはしません。私たちがあなたがたのところに行くのも、神が私たちに量って割り当ててくださった限度内で行くのです。」ここでパウロは限度を超えて誇りはしないが、限度内では適切なレベルの誇りがあるということを示唆しています。その誇りとは神が私を通してしてくださったことに関することです。神によってなし得た事柄に関係するものです。その誇りは肉的な誇りとは関係がなく、神に感謝し、神に栄光を帰すことと一致する誇りです。それは自分と神との間でだけ持つものであって、他の人と比べることによって評価が変わって来るようなものではない。ですからパウロは5節で言います。「人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」 私たちにはそれぞれ、神によって与えられている重荷、使命、自分の一生のミッションがあります。そのために神はめいめにユニークな賜物も授けてくださっています。その召命と賜物は一人一人別々ですから、それらを人間の間で比較することは全く意味のないことです。ですからここで自分の行ないを良く調べるとは、自分の人生をもう一度、神の前で考え、確かめるということです。神は私たちそれぞれに、賜物や能力、人間関係や機会、時間などを与えてくださっています。そしてそれ

らをただ自分のためではなく、他者の益のために用いるようにと与えておられます。その神の前で、自分がなすべき歩みをささげて行くのです。人と比較するのではなく、一人一人が自分の務めに邁進するということなのです。

私たちはこの御言葉のもとで振り返ってみてどうでしょうか。御霊の人とは、一人偉そうな振りをしたり、他の人を見下したり、他者と争って騒ぎを起こす人ではありません。御霊の人とは兄弟姉妹に仕える人です。御霊の実としての柔和さを発揮して、過ちに陥った人を優しく正す人です。自己点検をおろそかにせず、へりくだって、他の人の益に仕える人です。そうして互いに愛し合いなさい！との律法を全うする歩みをささげて行く人です。私たちはこの道を自分が進んでいるかどうかを点検させられたいと思います。そして御霊の思いをもう一度わきまえて、改めてこの歩みを目指して進めるように祈り求めたい。益々御霊の実が私の内に豊かに結ばれるように。そして兄弟姉妹を助けるために仕え、その重荷を負い合い、キリストの律法を全うする者となるように。そうして神が自分に与えてくださった召しに答えて歩み、かの日には喜びをもって神に地上の歩みを報告し、すべての栄光を神に帰す歩みへ進みたいと思います。